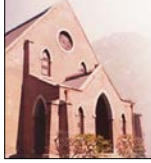


キリスト教の拡大



Overview

- 教義の形成
- コンスタンティヌス体制
- 十字軍
- 宗教改革
- 教派の分裂
- エキュメニカル運動
- ホロコースト
- 一神教間の相互関係の変化

教義の形成（4-5世紀）

- イエスの神性と人性
- カルケドン公会議（451）において、イエスは「真の神であり、真の人」とされた（両性説）。単性論者（神性を強調）は異端とされた（→**コプト教会**、エチオピア教会、アルメニア教会）。
- エフェソス公会議（431、テオトコス論争）では、イエスの人性を強調した**ネストリウス派**も異端とされた。ネストリウス派は後にイスラームに影響を与える（→アッシリア教会、景経）。
- 三位一体
- 5世紀に、父なる神、子なる神、聖霊なる神は、独立した存在（ペルソナ）でありながら一つの本質であるという三位一体論が確立した。
- 三位一体論は、ユダヤ教やイスラーム教からは**唯一神信仰**からの逸脱と見られる。

コンスタンティヌス体制

- **絶対平和主義** (pacifism) から**正戦論** (just war) へ
- コンスタンティヌス体制（313年、ミラノ勅令）以降、絶対平和主義の考え方は、徐々に主流から傍流へと移行していく（392年、テオドシウス1世によりキリスト教は国教に）。

十字軍——イスラームとの衝突

- 1095～1270年、8回の遠征
- ウルバヌス二世のクレルモン会議での演説（1095年）「かくて互いの間に平和を保つことを約したおん身らは、東方の兄弟たち、神に背く呪われた種族の脅威にさらされている兄弟たちを、救う義務を負っているのである」。
- ウルバヌス二世による十字軍の呼びかけには、**異教徒**によって「**汚染**」された聖地を「**浄化**」しなければならない、という主張があった。また、人々の間には世界の終末が近い、という期待があった。

十字軍の影響史

- 十字軍以降、イスラームはキリスト教にとって大きな脅威と見なされた。こうした考え方は、後の時代にまで形を変えて引き継がれ、今日のイスラーム嫌悪感情の一部になっている。
- ビン・ラティン等、イスラーム過激派からは、アメリカの中東進出（湾岸戦争、イラク戦争）が「**十字軍**」と見なされ、それに対し「**ジハード**」が呼びかけられてきた。

十字軍と反ユダヤ主義

- 十字軍の拡大は、ユダヤ人に対する暴力にもつながった。フランスやドイツの一部では、ユダヤ人に対する略奪が行われた。
- エルサレムを支配していたムスリムが「遠い」異教徒であるのに対し、ユダヤ人は「近い」異教徒と見なされた。

宗教改革 (1517-)



ローマ・カトリック教会
(ヴァチカン)

聖書のみ

教皇が出す諸文書ではなく聖書のみを基礎とする。

信仰のみ

カトリックが推奨する行い（たとえば免罪符の購入）によってではなく、信仰によってのみ、神の前で義とされる。

万人祭司

カトリックの階級制度に依存することなく、万人が神の前で平等に祈り、奉仕することができる。

教派の分裂

- 原理主義 (Fundamentalism)** の起源 (原型) としての宗教改革
- 三十年戦争を「宗教戦争」として単純化することはできないが、カトリックとプロテスタントの対立が背景にあることは間違いない (**教派对立**)。
- プロテスタント内部における教派形成
- ルター派 (ルーテル) 教会、改革派教会・長老派教会、会衆派教会、バプテスト教会、メソジスト教会、等々

エキュメニカル運動

- エキュメニカル運動 (教会一致運動)
- 1910年のエジンバラ世界宣教会議が起源
- 世界教会協議会 (World Council of Churches)
- 1948年、オランダのアムステルダムで発足。ヨーロッパと北米を中心とする147の加盟教団から始まったが、今では、110以上の国から345の教団が加盟している。東方正教会は設立当初からのメンバーであるが、ローマ・カトリック教会は加盟していない。ただし、カトリックは様々な会議でオブザーバーとして参加し、共同の作業に加わっている。



ホロコースト



- ナチス・ドイツによるユダヤ人の大量殺戮。
- 西洋キリスト教世界において蓄積されてきた反ユダヤ主義が要因の一つ。
- しかし、ホロコーストを反ユダヤ感情 (憎悪感情) だけで説明することはできない。

ユダヤ性—近代的暴力

- 「近代的平等概念の攻勢を免れることが可能であるならば、まずなによりも、ユダヤ人の特異性が、再度、明確化され、文化や自己決定といった人間的な力に屈しない、新たな土台にのせられねばならない。ハンナ・アーレントの簡潔な一説に従えば、ユダヤ教はユダヤ性に取って代われねばならなかった。「ユダヤ人はユダヤ教から逃れて改宗の道にはしることができた。ユダヤ性には脱出路がない」(ジークムント・バウマン『近代とホロコースト』大月書店、2006年、77頁)。
- 強制収容所のユダヤ人を呼ぶ隠語としてMuselmann (回教徒=生ける屍) が使われていた (柿本昭人『アウシュヴィッツの回教徒』春秋社、2005年)。

戦争とエキュメニカル運動

- 戦争と教会
- 戦時下においては、多くの国で、教会がナショナリズムと一体となり、戦争協力をすることになった。ただし、平和主義（戦争反対）を唱えた教会も存在した。
- ディートリヒ・ボンヘッファー（1906-45）
- ナチスの暴走を止めるため、国の違いを超えたネットワークであるエキュメニカル運動に望みをかけた。



一神教間の相互関係の変化

- 第二バチカン公会議（1962-65年）
- Nostra Aetate (In our time, 1965年)：キリスト教以外の宗教と教会の関係。ムスリム、ユダヤ人との関係も大きく転換した。
- 宗教間対話の展開（1970年代以降）
- 9.11同時多発テロ（2001年）以降の時代
- イスラームとの関係の悪化
- 同志社大学 一神教学際研究センターの設立（2003年）

